Peace Seeds ヒロシマの10代がまく種

海外でボランティア活動に挑戦する高校生が広島県内にいます。途上国などで貧困や経済格差といった現実に向き合いながら、食や教育の面で、子どもたちを手助けしようと励んでいます。

日本で生まれ育った若者は、衣食住をはじめ電気や水道といった、社会生活を支える基盤を「当たり前」に感じがちです。しかし、アジアやアフリカの途上国に行くと、「不十分」と思える状況にギャップを感じ、驚きます。

同時に、社会環境が十分に整備されていない中でも、現地の人たちが幸せに暮らす現実にも感動します。「物の豊かさだけが幸せを図る基準でない」。海外で日本語を使わず試行錯誤するうちに、自分を見つめ直し、他者を思いやる視点も芽生えているようです。

返済が不要な国の奨学金を使って、現地で活動する方法もあります。若いうちに経験してみませんか。

△ピース・シーズ▽
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学1年から高校3年までの30人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第38号　高校生の海外ボランティア

世界の現実に 驚きと発見

幸せの基準 モノではない

「途上国の子どもに夢を与えたかった」。尾道東高（尾道市）2年の大畠奈都子さん(17)はスリランカで7月から1カ月間、チャイルドケアのボランティアに参加しました。

保育士を目指している大畠さん。幼稚園では自作の人形で物語「はらぺこあおむし」を英語で上演しました。青虫からチョウに変身する場面では「たくさん食べて美しいチョウに成長したように、さまざまな経験をして夢を持って羽ばたいて」と思いを込めました。

今回の経験で、物質的な豊かさイコール精神的な豊かさとは限らないと痛感しました。滞在中に出会った現地の約40人に「幸せ度は何%か」と聞いたところ、平均97%と予想外に高い結果だったのです。「シャワーは水。止まることもあって驚いた。でも現地の人はみんな笑顔で暮らしていた」

日本人の目線で「してあげる」のではく、彼らに何が必要か調べサポートする大切さを知りました。「英語をもっと勉強して再び訪れたい」。飛躍を誓います。（高1沖野加奈）

スリランカの幼稚園で「はらぺこあおむし」の劇をする大畠さん（右端）

幼稚園で人形劇 in スリランカ　尾道東2年大畠さん

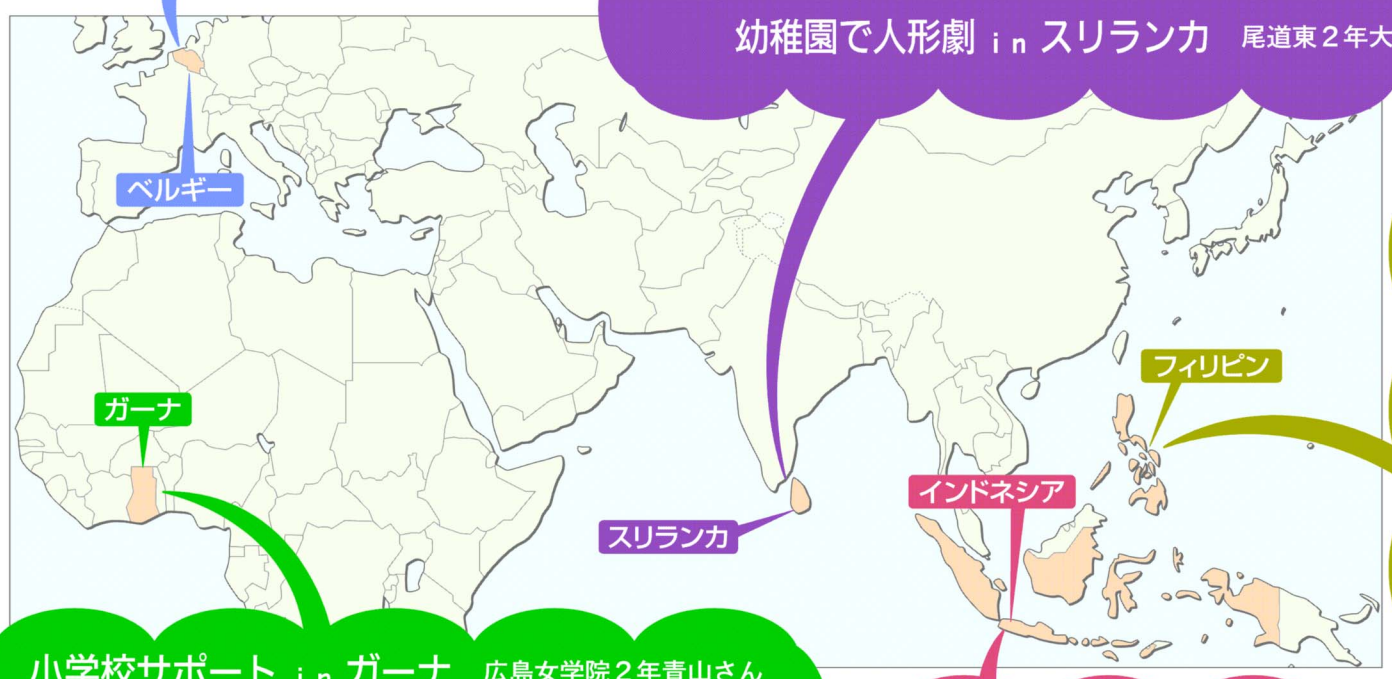
祖子さんの祈り発信

舟入高（広島市中区）3年の岡本歩実さん(19)＝写真＝は昨年8月から今年7月までベルギーに留学。2月の5日間、日本文化を現地で広める非政府組織（NGO）に自ら提案し、子どもたちに折り鶴を教えました。

「世界に広島の歴史を伝えたい」と出発前から考えていました。原爆による白血病のため12歳で亡くなった佐々木祖子さんを紹介した上で一緒に作ります。真剣に聴く子どものまなざしをうれしく思いました。

国籍に関係なく分かり合える世界を目指し、相手の考えを尊重しながら自分の意見を伝えていこうと考えています。（高1沖野加奈）

折り鶴紹介 in ベルギー
舟入3年岡本さん



貧困層に食事提供 in フィリピン

尾道東2年井上さん

フィリピンの山村で子どもに話し掛ける井上さん㊨

劣悪な環境 想像以上

美しく青い海が広がるフィリピンのリゾート地、セブ島。ここから車で30分ほど走るとスラム街が広がります。尾道東高（尾道市）2年の井上理園さん(17)はその格差に強い関心を持ち7月下旬から3週間、現地で子どもたちに食事を提供するNGOの活動に加わりました。

向かったのは墓地にあるスラムや、町の開発のため山村に追われた人たちの集落…。廃材やトタンで造った粗末な家が並んでいます。多くの人は仕事がなくその日暮らし。母になって路上生活する14歳の少女や薬物中毒で目がうつろな人にも会いました。

60～70人分の食事作りのほか、子どもたちに英語や折り紙も教えました。「想像以上に貧しく、衛生面も悪かった」。一方、住民が支援に慣れていると思うことも。「一緒に作った折り紙が捨てられていたのです。

保健師を目指す井上さん。「途上国の衛生状態を良くし、貧困層の女性の社会進出を支援したい」と力を込めます。（中2自黒美貴）

児童と交流 in インドネシア

舟入3年岡田さん

2014年8月から1年間、インドネシアに留学した舟入高（広島市中区）3年の岡田莉子さん(19)＝写真＝は、首都ジャカルタの児童養護施設で一日ボランティアを体験しました。絵を描き、絵本の読み聞かせをして交流。病気で会話が困難な子も多く、最初はコミュニケーションの取り方に戸惑いました。そのうち笑顔になる子どもを見て不安は和らぎました。

治安への不安も感じました。帰りに車へ戻ると窓ガラスが割られ、中の荷物が盗まれていました。それでも「大学で再び訪れ文化を深く学びたい」と望んでいます。（高3鼻岡舞子）

読み聞かせで笑顔に

小学校サポート in ガーナ

広島女学院2年青山さん

ガーナの小学校で児童と遊ぶ青山さん（左端）

言葉の壁に悔しさ

「英語を学び、自分の考えをしっかり伝える努力が大切」。7月10日から1カ月間、ガーナでボランティアをした広島女学院高（広島市中区）2年の青山姫梨さん(17)は振り返ります。

首都アクラから北へ約50キロの町で活動しました。小学校に行くと、机はガタガタ、図書室も本棚が壁の1面にしかなく、教育環境が整っていない現状を目にしました。校舎の壁を塗ったり、机や本棚を作ったりしてサポートしました。

児童に、安全な飲み水やけがへの対処法について、公用語の英語で教える時間がありました。しかし自分の英語力では詳しく伝えられず、悔しさが残りました。意見をはっきり主張する欧米のボランティア仲間とも、十分に話し合いできないままに終わりました。

言葉の壁を感じた一方、自分の顔を覚え毎日駆け寄る児童の姿がやる気に結びつきました。「どの子も人なつっこく、楽しそうに勉強していた」。今回の経験をばねに、将来は英語を使って途上国の開発問題に携わりたいと考えています。（高2山田千秋）

活動の魅力と心得　学びの場／国境超えた友情も

恐れず話す勇気を

海外ボランティアの良さと、活動中に心掛けることは何でしょう。5人の話を基に考えました。

行った国の現状や価値観を知る「学びの場」になります。国境を超えて友情の輪を広げられ、将来の仕事を決めるきっかけにもなるでしょう。

英語など言語力が不十分でも、恐れずに話す勇気を持つことが大切です。現地では「自分の身は自分で守る」気持ちを忘れず、帰国後は報告会を開いて体験を共有しましょう。（高1岡田輝海、中3川岸言統）

次回は12月15日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=66374）にアップします。